第１１話　文物の伝来

属国となった三韓から頻りに文物を伝えて来た。 わが国の文明は頓に進歩した。

新羅が降伏して、高句麗も百済もわが国に貢物を奉るようになると、九州の熊襲はおのずから鎮まって、叛かなくなった。　これが**神功皇后**のお手柄であることはいうまでもないが、新羅征伐のお手柄にはまだまだ外にもっと大事な事がある。　それはこの後、朝鮮の各国から文物が伝わって来て、大いにわが国の進歩を助けたことであります。

文物の伝来

今日の眼で朝鮮を見ると、事が異なるので、ちょっと分りにくいかも知れないが、その頃の朝鮮はわが国よりもずっと開けて、学問も技芸が発達していた。　それというのは、中国大陸と陸続きであるところから、大昔から開けていた中国と早くから交通して、その文明の影響を受けていたからです。　それで、一旦わが国の属国となってからは、毎年奉る貢物の外に、その進歩している学問や技芸をも次第に伝えて来ました。

学問

第１５代**応神天皇**の御代に、百済の王が**阿直岐**という者を使いとして良馬を２匹ほど献上して来ました。

この**阿直岐**は、学問もよく出来たので、**天皇**は太子の**菟道稚郎子**に、**阿直岐**を師として学ばせになったが、ついでに、もっとすぐれた師匠を太子の為に求めようとおぼしめして、ある日、**阿直岐**に、「百済にはお前よりすぐれた学者がいるか？」とお尋ねになった。　「**王仁**と申す者が居ります。 すぐれております」と**阿直岐**が申し上げると、**天皇**はわざわざ使いを百済に遣わして**王仁**をお徴しになりました。　それで**王仁**は、論語十巻と千字文一巻を携えてわが国に渡って来ました。

この論語というのは、**孔子**という中国の昔の聖人が説いた儒教という教えを記した本で、千字文というのは、普通に使う一千字の漢字を選んで、それを読みやすい文章に綴ったものです。　**王仁**は先づこれらの本に就いて太子にお教え申し上げたのでありますが、これがわが国に中国の学問や文字の入った始めだと伝えられています。

なお、**王仁**や**阿直岐**はそのまま日本にとどまって（すなわち帰化して）日本の国民となったので、その子孫も永く朝廷に仕えて、学問の事や記録の事などを掌ることとなりました。

工芸

また、百済の王は機織や裁縫の上手な工女を送って来たり、鍛冶の巧みな職工や、酒や醤油の醸造に秀でた者などをも送って来ました。　中国の**秦の始皇帝**という天子の子孫であるといわれている**弓月君**という人などは、それまで永く百済に住んでいたのですが、この**応神**天皇の御代に、わが皇室の威徳を

慕って、一家一族１２７県の民を引き連れて渡って来ました。　この人は殊に養蚕や紡織の業に秀でていたので、帰化して日本の国民となると、**波多の公**という姓まで賜りました。

実に、こういう人々が次々に渡って来て、忠実に働いたために、わが国の工芸は目ざましく進歩しました。　また一方から見ると、いかにその頃の中国や朝鮮が常に乱れていて人々が住みにくく、わが国がよく治まって、安心して住むことが出来たかということも分ります。

天皇政治、神ながらの道

一体、わが国には大昔から伝え来ました神ながらの道があって、代々の天皇はそれに則って政治をされています。　それは**天照大神が**高天原をご支配になったように、全く公明正大で、一点の私もなく、自然に任せて、君も臣も神さながらに平和に幸福に暮らすことを理想とされているのです。

天照大神の子孫であらせられる代々の天皇は、いつもご自身が**大神**のお代りすなわち現人神となって、昔、**大神**の民であった者の子孫である民を御支配になっているのですから、この君臣の関係は永久に変りません。

ところが、中国や朝鮮では強い者がいつでも起って君主になることの出来る国であり（訳注：これを難しい言葉ですが易姓革命の国という）、民も祖先も同じくしている一民族ではないのですから、君民の関係が全くわが国とは異なっています。　いつ誰がどこから起って君主の位を取って代ろうとするかも知れないので、君も君として安心して支配していることが出来ないと共に、その取って代ろうとするために絶えず戦争が起るので、民も民として安心して住むことが出来ないのです。

殊に**応神天皇**の御代の頃には、中国や朝鮮はそれがひどかったので、従って、日本に渡って来たものが多かったのであります。

外国の教とわが国

また、この時に入ってきた儒教という学問なども、今話したように、もともとわが国とは全く国体の異なる仁義道徳を説いた教えですから、そのまま受け入れてわが国の教えと出来ない所もあったのは勿論です。　しかしわが国民は、何事に対してもそのすぐれた所だけを取り入れて、決して鵜呑みにはしないという長処を持っていますので、儒教からもやはりその良い所を取って、わが国民の道徳を進めるようにしました。

これは後に仏教が入って来た時にも、キリスト教が入ってきた時にも、その他の思想や学問が入って来た時にも、いつも同じでありました。

（**第 11 話　文物の伝来**　　終わり。　　次は前頁に戻り、**第 12 話　仁徳天皇の御仁慈**　へ）